

『源氏物語』の末摘花造型に関する考察

金玉京*

目次

1. はじめに
2. 『無名草子』の末摘花評
3. 末摘花の生活態度と父宮の影響
4. 末摘花像に内在する二つの側面
5. 末摘花による現世批判
6. おわりに

1. はじめに

末摘花は『源氏物語』の男主人公の光源氏に関わる女性であるが、その誇張された醜い姿や古風で格式ばった生活態度が強調して描かれているため、人々の笑いを誘う人物である。その点、末摘花は『源氏物語』の他の人物とは違って異質な存在ともいえよう。それでは一体、末摘花造型を通して、この物語が本質的に追求しようとしたのはなんであろうか。末摘花は大きく戯画的部分を持ちながらも、この人物のあり方は二面性をもって捉えられる。そこに含まれている意味を考えるのは、末摘花に対する理解を深めることに繋がると思う。そして『源氏物語』における末摘花造型の本質の意味は、寧ろ彼女の持つこの二面性とでもいべきあり方で明らかになるのではなかろうか。本稿では末摘花という人物のあり方を考察し、『源氏物語』の中で末摘花造型の持つ意味を明らかにしたい。

2. 『無名草子』の末摘花評

十三世紀初め頃に書かれた『無名草子』の源氏物語論には、末摘花を取り上げて、次のように評している。

「末摘花、好もしと言ふ」とて、(皆さんは私を)憎み合はせ給へど、(末摘花は)大貳の誘ふにも心強く靡

* 武庫川女子大学大学院 文学研究科 博士後期課程 日本語日本文学専攻

かで、死にかへり、昔ながらの住まひ改めずつひに(光源氏を)待ちつけて、(光源氏が「深き蓬のもと
の心を」とて分け入り給ふを見るほどは、誰よりもめでたくぞおぼゆる。みめよりはじめて何事もな
めならむ人のためには、さばかりのことのいみじかるべきにも侍らず、その人がらには、仏にならむ
よりもありがたき宿世には侍らずや。

(無名草子・三〇)¹⁾

私が、末摘花が好ましい人物だというといっただけで皆さんは非難するけれども、末摘花は叔母の大貳の
筑紫下向の誘いにも強情に従わず、死ぬほど苦しい思いをし、昔のままの住まいで光源氏を待ちつづ
けて、光源氏の訪れを迎えたときの場面は、誰の場合よりも素晴らしいと思われる。外見をはじめと
して、何事も普通の人にとっては、その程度のことは特にうれしいことでもないであろうが、末摘花
の人柄としては、成仏するよりもまれなほどの優れた宿世ではなかろうか。

要するに、末摘花が貧窮の生活に耐えて光源氏の訪れを待ちえたのは、何よりも素晴らしいこと
である。末摘花は並々の外見を持つわけでもなく、生活などにもとても困っていた。末摘花のような状
況では、叔母の大貳の筑紫下向に従ってもおかしくない。しかし、末摘花はひたすら苦しい状況に耐
えていたのである。彼女が光源氏の訪れを迎えることができたのは、常識的には考えられない末摘花
の人柄によるものであった。その末摘花の人柄こそが彼女の優れた宿世であるのだ、と『無名草子』は
言っているのである。

「その人がらには、仏にならむよりもありがたき宿世には侍らずや」の部分にこそ、この『無名草子』
の作者の言う核心があるように思われる。桑原博史氏の注には、「極樂往生を遂げる以上にめったに
ない運命ではありませんか。当時、女性の極樂往生は非常に困難なことでとされていたから、めったに
ないことの例示とした」とある²⁾。桑原氏は、仏になることと極樂往生を遂げることを同様のものとし
て見ているようだが、それはやや違うと思う。仏になることは極樂往生を遂げて、さらに一所懸命修
行を積んだ後のことなのである。それほど仏になることは難しく、そうなると人は少なかった
のである。しかも、仏教では女性に生まれたことだけでも、罪のあるように考えられていたので、女
性が仏に生まれ変わることは、かなり難しいことであった。『無名草子』の作者は、末摘花の宿世を仏
に生まれ変わることに、めったにないものとして考えていたのである。

また、久保木哲夫氏は、この部分を「末摘花のような人間にとっては、仏に生まれ変わることに
めったにない運命ではありませんか。」と譯し、「仏に生まれ変わることもむずかしいが、彼女程度
の人が源氏の再訪を受けることはもっと大変」と注している³⁾。久保木氏の「末摘花のような人間」とい
う解釈は『無名草子』の「その人がら」という部分に当たると思うが、『無名草子』が末摘花という人物を
そう見ていたとは思えない。単に「その人」と言ってもよさそうな部分を、『無名草子』の作者はわざわざ
「その人がら」というふうに書いていることに注目したい。そこには久保木氏が、末摘花を「彼女程
度の人」と言っていることとは異なる意味を含んでいると思う。氏が末摘花を「彼女程度の人」と言っ
ているのは、一般に言われる末摘花の滑稽さにだけ注意した解釈のように考えられる。勿論、『無名
草子』には、末摘花を好ましい女性と呼ぶことへのためらいがあるのも事実である。『無名草子』では
末摘花を好ましい女性といいながら「(皆さんは私を)憎み合はせたまへど」とことわっている。『無

1) 「無名草子」の本文引用は新潮日本古典集成『無名草子』(新潮社・1989)による。以下、すべての本文中の傍線
と()は筆者による。

2) 上掲書と同じ。p.30

3) 久保木哲夫校注・譯(新編古典文學全集『無名草子』小學館・1999) p.193

名草子』が書かれた当時にも、やはり末摘花は好ましい女性として思われていなかったようである。しかしながら、一般的にはあまり優れた女性として見られなかった末摘花を、この『無名草子』の作者はどうして好ましい女性として見ていたのであろうか。『無名草子』の作者は、単に光源氏を待つ末摘花の行爲だけを好ましく思ったというより、光源氏との再會を可能にした末摘花の人柄に、その好ましさを見たのだと考えられる。それでは、『源氏物語』では末摘花という人物像がどのように描かれていたのであろうか。末摘花像を具体的に見てみたいと思う。

3. 末摘花の生活態度と父宮の影響

末摘花は思いもかけず光源氏と契りを結ぶ。当時の結婚風習では、婿の衣服などの世話は女側がするのが原則であった。末摘花自身もそういう風習は知っていて、自分は宮家の主人として婿の光源氏の衣服の世話をしなければならないと思う。そういうわけで、末摘花は貧しい生活をしながらも、正月になると光源氏に衣裳を贈るのである。また、玉鬘の裳着の際には、自分は光源氏の妻だと思ってお祝いの衣服を贈る。末摘花は、自分なりに出来る限り精一杯、光源氏の妻としての道理を果たそうとしたつもりであるが、しかし、その衣はあまりにも時代遅れの古めかしいもので、そのセンスのなさは皆に笑いを齎す。さらに、衣服と一緒に贈った「唐衣」の歌も光源氏をがっかりさせるものであった。このような末摘花の古風な教養や生活態度は、彼女を笑いものとする主な要因である。深窓の内に閉ざされた平安時代の女性にとって、歌や贈物は社会生活の一環として何より重要な手段であった。これらによって相手の女性の教養や器量が問われていたともいえよう。しかし、末摘花は歌や贈物など上手ではなかった。この末摘花の教養や生活態度が、どのように思われていたかは、末摘花の歌に対する光源氏の批評の部分に端的に示されている。光源氏は末摘花の「きてみればうらみられけり唐衣、かへしやりてん袖をぬらして」という返歌を見て、次のように和歌について論じている。

(光源氏)「古代の歌詠みは、唐衣、袂濡るるかごとこそ離れねな。まろもその列ぞかし。さらに一筋にまっはれて、いまめきたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ姫きことははたあれ。人の中なることを、をりふし、御前などのわざとある歌詠みの中には、円居離れぬ三文字ぞかし。昔の懸想のをかしきいどみには、あだ人といふ五文字をやすめ所にうち置きて、言の葉のつづき、たよりある心地すべかめり」など笑ひたまふ。(光源氏)「よろづの草子、歌枕よく案内知り見つけて、その中の言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ、強うは変らざるべけれ。常陸の親王の書きおきたまへりける紙屋紙の草子をこそ、見よとておこせたりしか。和歌の髓脳いとところせう、病避るべきところ多かりしかば、もとより後れたる方の、いとどなかなか動きすべくも見えざりしかば、むつかしくて返してき。よく案内知りたまへる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」とて、をかしく思いたるさまぞいとほしきや。(玉鬘・一三八)4)

昔の歌の詠み方では末摘花が歌に使った「唐衣」とか「袂濡るる」というような恨みごとが決まり文句であった。この他にも歌會の席では「円居」の三文字を使い、風流な戀のやりとりには「あだ人（底本には「の」がある）」という五文字が詠み込まれないと落ち着きがない。光源氏はこのように末摘花の

4) 「源氏物語」の本文引用は、以下、すべて新編古典文學全集『源氏物語』による。

昔風の固定された詠み方を指摘して笑う。

ここで光源氏が言っているのは、要するに今の世は歌の詠み方も昔とは違っている。昔の歌の詠み方には、その場その場で自分の感情を表現しようとする態度が乏しく、型から離れた歌を詠む事はせず、自由な発想を持たなかった。末摘花の場合は、父宮が書き残した和歌の詠み方をみて、それを學び、歌の詠み方の規則に捕われて自由な発想の歌が詠めない。末摘花は昔の歌の詠み方の教科書によく使われていた「唐衣」や「袂濡るる」などの固定された句を、そのままとり入れて詠めば歌になると思っているのである。つまり、光源氏は末摘花の歌の詠み方の保守的な態度を笑いながら非難しているのである。

ところが、この末摘花の生活態度に見える保守性は、父常陸親王から受けた教育をそのまま無批判に守りとおしているためのものであった。この末摘花の守旧的な姿勢は非難の対象になり、いたるところで戯畫化されている。但し、この物語では、末摘花の父宮の教えを墨守する姿勢は、決して人々の笑いの対象にされるばかりではない。

……（女房たちは）いとかうもの恐ろしからぬ御住まひに、思しうつろはなむ。立ちとまりさぶらふ人も、いと堪えがたし」など聞こゆれど、（末摘花は）「あないみじや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しかなごりなきわざはいかがせむ。①かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住み處と思ふに慰みてこそあれ」と、うち泣きつつ、思しもかけず。—中略—例の女ばら、「いかがはせん。そこそは世の常のこと」とて、取り紛らはしつつ、目に近き今日明日の見苦しさをつくろはんとする時もあるを、いみじう諫めたまひて、（末摘花）「父宮が調度などを私は②見よと思ひたまひてこそしおかせたまひけめ。などてか軽々しき人の家の飾りとはなさむ。亡き人の御本意違はむがあらねなること」とのたまひて、さるわざはせさせたまはず。（蓬生・三二九）

光源氏の須磨退居以来、貧しさに耐え切れない女房たちは、女主人の末摘花に家を賣り、あるいは調度を賣って生活することを勧める。貧しい生活をしている末摘花邸ではあるが、庭の木立などは立派に残っているようであって、それを賣ると当分の間は今より少しよい生活ができるはずである。しかし、末摘花は世間の人たちが貧しさに堪えられず邸を賣った自分をどう思うか、まず世間の人たちの目を気にする。これは末摘花が世間の噂によって自分や家の名譽に傷がつけられることを恐れていたからである。それで、末摘花は自分が生きている間に屋敷を人に賣るといふ宮家にとって不名譽なことはするまいという。このように世間を恐れる心は、『源氏物語』では末摘花に限らず男女ともに強い。「人笑へ」「人笑はれ」「人聞き」等の語の頻繁な使用、「音聞き」「世の聞こえ」「世語り」「世のもどき」「人のもの言ひ」「世の聞耳」「人の思ふらん事」等、数多くの似た言葉は、世間を恐れる発想から用いられている⁵⁾。つまり、末摘花のこの対応の仕方は、宮家の人間としての誇りという身分意識に起因しているのである。

さらに、末摘花は世間の噂だけではなく、①のように、このように恐ろしく荒れ果てた邸ではあるが、親が住んだ邸と思うと、自分にはそれが慰めになっているのだともいっている。また、女房たちが貧しくなると調度などを賣って生活することは、世間の常識であると言ったのに對して、末摘花は②のように、親が手に入れた調度を失うことは「亡き人の御本意」を違えることであって、調度を賣って生活することなど思いもよらない。貧しくても末摘花は亡き父宮の遺品を守って放さない。このようにして末摘花は父のころからの暮らしぶりをそのまま受け継いで暮らしているのである。この例で

5) 山本利達「拒否の心情—源氏物語の女性について—」(『國語國文』1969・2月) p.21

も父の教えを墨守する末摘花の姿勢には変りない。が、このような末摘花の様子からは笑いというよりも、寧ろ落ちぶれても誇り高い姫君としての印象を受ける。さらにこういう末摘花の姿勢は、宇治の大君が父宮の遺言を守ろうとする考え方にも共通している。勿論、宇治の大君が自分の生きる道として父宮の遺言を選んだことと、末摘花のそれとはやや異なっている。末摘花には自らの主体的な判断により父宮の方針を選んだわけではないからである。末摘花は「親のもてかしづきたまひし御心のおきてのままに（蓬生・三三一）」生きることしかできない女性である。このような末摘花のあり方こそが、實に末摘花の本性とでもいべきものの持つ特徴ではあるまいか。作者もまたそういう末摘花のあり方に注意を拂いながら物語っていたのではなからうか。それでは、末摘花の生活態度に根ざしている彼女のあり方を具体的にみたい。

4. 末摘花像に内在する二つの側面

光源氏の須磨退居後、物語に新しく登場した末摘花の叔母は、末摘花の貧困ぶりを聞いて、九州へ一緒に下ろうと末摘花を誘う。しかし、末摘花は叔母の誘いに応じようとしない。この叔母とのやり取りは末摘花のあり方を鮮明にするものであった。

(叔母は)この君(=末摘花)をなほも誘はむの心深くて、「遙かにかくまかりなむとするに、心細き御ありさまの、常にしもとぶらひきこえねど、近き頼みはべりつるほどこそあれ、いとあはれにうしろめたなくなむ」など言よがるを、(末摘花は)さらにうけひきたまはねば、(叔母)「あな憎。ことごとしや。心ひとつに思しあがるとも、さる藪原に年経たまふ人(=末摘花)を、大將殿(=光源氏)もやむごとくしも思ひきこえたまはじ」など怨じうけひけり。(蓬生・三三三)

要するに、叔母は、末摘花がわが身の上を誇り高く思い、須磨に退居している光源氏が歸京して訪れることを期待するから自分の勧めに応じないのだ、と思い込んでいる。勿論、末摘花に光源氏を待つ心があるのを否定するわけにはいかない。しかし、末摘花本人は叔母の言うように光源氏が訪れてくれると思って、叔母の言葉にわざと答えなかったわけではない。末摘花は叔母の思惑を見抜いたり、叔母の言葉に従うのがよいかどうか判断したりする人ではなかった。末摘花は「人にいどむ心にはあらで、(蓬生・三三三)」内気な性格のために、これまで叔母とも親しく付き合っただけでなかった。そういう末摘花の性格が叔母の勧めに對して「さらにうけひきたまは」ない態度として現れたのである。つまり、末摘花には最初からこの叔母の誘いに応ずることなど思いもかけられなかった。それを叔母は末摘花の誇り高さとか光源氏を待つがゆえだとかいうふうに分勝手に思っている。このような性格を持つ末摘花は物語の初めの方では、おもしろくおかしい表現を用いて描かれてきた。しかしながら、この叔母とのやり取りにおける末摘花の愚鈍さを、物語では決して揶揄するような表現を用いていない。寧ろ物語では叔母の方を「やむごとなき筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心すこしなほなほしき(蓬生・三三三)」人物だと冷やかな目で見ているのである。この末摘花の愚鈍さは決して笑われたり非難されたりする類のものではない。

さて、叔母の誘いに答えることすらしなかった末摘花が、次のように叔母の誘いを断わるのは、どう理解すべきであろうか。

(末摘花)「いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも亡せめとなむ思ひはべる」とのみのたまへば、一中略(末摘花)げにと思すもいと悲しくて、つくづくと泣きたまふ。されど動くべうもあらねば、(叔母は)よろづに言ひわづらひ暮らして、「さらば、侍従をだに」と、日の暮るるままに急げば、…… (蓬生・三四〇)

末摘花は、叔母の誘いは本当にうれしいことだと言っている。しかし、自分はこのように変わり者なので、叔母の誘いに従ってこの家を離れることはできない。このまま朽ち果てようと思うと言っている。ここで注意すべきことは、末摘花が叔母の言葉に従うことも拒むこともできるのに、つまりどちらかの途を選択できる場所で、拒む途を選んだのではないということである。末摘花には父から伝えられたものを墨守する以外の途は考えられなかったのである。もともと「人のいふことは、強うもいなびぬ御心(末摘花・二八一)」の末摘花が、このように頑固な姿勢を見せるのは、父宮に關わりのあることだからである。すでに見てきたように、末摘花は父宮の住んだ屋敷である故に、そこから移ることに思いもよらなかった。そして、父宮の備えた調度を失うのは、「亡き人の御本意」を違えることでもあったので、昔からの暮らしぶりを変えることなく、暮らしてきたのであった。しかしながら、叔母は貧窮な末摘花が自分の誘いに応じないことを、「(末摘花が)かかる(=落ちぶれた)御ありさまにて、たけく世を思し、宮、上などのおはせし時のままにならひたまへる御心おごりのいとほしきこと、といとどをこがましげに(蓬生・三三五)」思っていたという。つまり、末摘花の態度は、高貴な身の上でありながら、身を落として受領の妻となった叔母の立場からすると、あまりにも現実感覚に乏しい愚かな人間のように思われたのである。

しかし、末摘花が本当に愚かな人物としてのみ描かれていると捉えたのでは、『源氏物語』の表現を一面的にしか受け取ってはいないことになりはしないか。父宮の教えにひたすら従い、それを黙々と守り通す末摘花の様子には、愚直さと同時に父宮の教えを信じ切る純粹さも窺わせるように描かれている。それは、つまり、末摘花という人物が世俗的・現世的には愚かであるが、同時にまた無垢の純粹さを持っている存在であるからであろう。あるいは無垢の純粹な存在であるからこそ、現世的には愚かに見えるのであろう。末摘花の一端で純粹な心は父宮に關することに限らず、光源氏の約束を信じる気持ちとしても現れている。

(侍従が叔母と一緒に筑紫へ下向することを)そそのかしきこゆれど、(末摘花は)なほかくかけ離れて久しうなりたまひぬる人(=光源氏)に頼みをかけたまふ。(末摘花の)御心の中に、さりとて、あり経ても思し出づるついであらじやは、あはれに心深き契りをしたまひしに、わが身はうくて、かく忘れられたるこそあれ、風の伝てにても、我かくいみじきありさまを聞きつけたまはば、かならずとぶらひ出でたまひてん、と年ごろ思しければ、おほかたの御家居もありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度どもなども取り失はせたまはず、心強く同じさまにて念じ過ごしたまふなりけり。(蓬生・三三六)

末摘花は光源氏が歸京したのを知りながらも、自らは光源氏との再會のために、どうしたらよいかも分からない。ただ、末摘花にできることは光源氏の「心深き」約束を信じて、「かならずとぶら」うことを疑わず、じっと待つことだけである。プレーボーイの光源氏が末摘花にどういうふうにも未來を約束したかはわからない。末摘花は、ただ光源氏の言葉をそのまま信じて、頼りにしていたのである。

末摘花は實に現實についていけない人物であった。末摘花は目前の生活の苦境を逃れて筑紫へ下向するよりも、専ら可能性の希薄である光源氏の訪れを頼りにして生きる女性であったのである。それは一般の人々には愚かさに見えても、その愚かさは疑うことのできない末摘花の純真さの現れではなからうか。物語は、そういう末摘花という人物の非常識な愚かさ、しかしその愚かさの持つ無垢の純真さという二つの側面を描いていたのではないか。このような末摘花の性質は、さらに乳母子の侍従に向かって話すところにも記されている。

(末摘花)「故まま (=侍従の母の乳母) ののたまひおきしこともありしかば、(私は)かひなき身なりとも見はててむとこそ思ひつれ。うち棄てらるるもことわりなれど、誰に見ゆづりてかと恨めしうなむ」とていみじう泣いたまふ。(蓬生・三四二)

ここで末摘花は、死んだ乳母の言い残したことをそのまま信じ、何があっても乳母子の侍従だけは、最後まで一緒だと思っていたという。このように末摘花は自分の身近な人から言われたことは一途に信じ、それを守り通すところがある。それは愚直さともいえるが、同時にまた素直さともいえよう。長い年月を共にしてきた侍従さえも、末摘花の置かれた境遇を思うと同情はするものの、目前の生活のことを考えると侍従は末摘花から離れていかざるをえない。末摘花には世の動きに敏感に反応することも、それにあわせて自分を変えてゆくこともできない。なぜならば、末摘花はこの世のことに愚かだからである。父宮の教えをひたすら墨守することも、光源氏を待ち續けることも、このような末摘花の愚直な性格に由来する。

つまり、末摘花の愚かさは同時に世間ずれしていない純粹さそのものなのである。物語で以上のような叙述が、物語の初めに描かれてきた末摘花に関するものだけということではなければ、おそらく末摘花のあり方は愚かさとか滑稽さとかを感じさせないものになっていたに違いない。この物語は末摘花を単に愚かな人間、あるいは滑稽な人間としてのみは描いていない。作者の深い人間理解により、末摘花の世間的な愚かさが、實はその純粹さからきていることを、二つの側面を持っている末摘花のあり方として描き出しているのである。初めに挙げた『無名草子』でも、末摘花という人物の愚かさも含めて、その稀な素晴らしい心を持つ人として好ましいと言っているのだ、と考えられる。

5. 末摘花による現世批判

それでは、末摘花のあり方の持つ二面性は、この物語にいかなる意味をもたらすのであろうか。叔母は侍従を連れて物語から姿を消し、末摘花邸の生活は寂寞を増していく。一方、光源氏は歸京したにもかかわらず、末摘花を訪れることは勿論手紙もない。しかし、末摘花邸の寂しい生活は、光源氏が花散里の屋敷にいく途中偶然に通るかかって末摘花邸を訪れることによって一変する。末摘花は再び光源氏の庇護を受けることになる。そして、物語では次のように末摘花の状況の変わったことに敏感に反応する人々の様子が描かれる。

いまは限りと侮りはてて、さまざまに競ひ散りあかれし上下の人々、我も我も參らむと争ひ出づる人もあり。(末摘花の)心ばへなど、はた、埋れいたきまでよくおはする御ありさまに心やすくならひて、ことなることなきなま受領などやうの家にある人は、ならばはしたなき心地するもありて、うちつけの

末摘花の性質は、ひどく内氣でおおらかなので、そういう末摘花のもとで女房たちは氣樂な生活に慣れていたのである。しかし、末摘花を見限って去った女房たちの中では、受領の家などに仕えてから、末摘花の性質のよさを改めて思う人もいたのである。つまり、末摘花の愚直な性格は少し立場を変えて見れば、非常な善良さまたは純粹さそのものなのである。しかし、末摘花のもっていたそのよさを世の動きに鈍感な欠点として、人々は末摘花の側から離れていったのである。このようにこの物語では環境の変化に対応して、自分を変えてゆくことのできない末摘花のあり方によって、世の動きに敏感に反応する人々の行動の輕薄さを照らし出すことになっている。

かつて西郷信綱氏は、このような末摘花という人物の形象には、「没落した貴族女性の精神的古風さをもって、当世風の俗物根性に對する獨自な批判としたものがある」と指摘し、末摘花を「黄金の心をもつ女性」と言った⁶⁾。しかし、『源氏物語』に描かれた末摘花は西郷氏の言っている「古風さ」という枠だけでは括れない。この物語では、單に末摘花の古風さを鏡にして、それに世の動きに敏感な人々の俗物性を映して批判した。というよりも、末摘花の存在の持つ根源的な無垢さ、あるいは無心さが一般の人々の輕率さや俗物性を浮き彫りにすることになったのだ、と考えられる。『源氏物語』では他にも第二部の女三の宮が末摘花のような働きをする存在といえよう。女三宮の存在が無心で無邪氣なだけに、かえって周囲の紫上や源氏の悩み多い姿は浮き彫りになっているのである。

さらに、西郷氏が末摘花を「黄金の心をもつ女性」と言ったのは、黄金のように永遠に輝く素晴らしい心を持つ女性、あるいはその純粹無垢な魂を持つ末摘花のような人の存在の貴重さを言ったものと思われる。末摘花のような純眞な心の持主の稀なことが次のように強調されている。

(女房)「末摘花か 変らせたまふ御ありさまならば、かかる淺茅が原をうつろひたまはでははべりなんや。ただ推しはかりて聞こえさせたまへかし。年経たる人の心にも、たぐひあらじとのみめづらかなる世をこそは見たてまつり過ごしはべる」と、ややくづし出でて問はず語りもしつべきがむつかしければ、…… (蓬生・三四七)

これは、光源氏の乳母子惟光が末摘花の安否を尋ね、それに對して答えた女房の言葉である。老いた女房は、惟光の應對に問わず語りをして、今まで末摘花のような人は見たことがない。これほど荒れ果てたところで、他に移ろうともせず暮らしているのは類のないめずらしさだといっている。このように、末摘花について物語は、單なる愚かな人間というふうには書いていないのである。いくら末摘花が今の世の常識からはずれていて愚かに見えても、それは本当の愚かさというより、實はあまりにも純粹無垢だからこそ、世俗の人には愚かに見えるだけだ、と言っているのである。末摘花という人物は、誇張された形ではあるが、表面的に愚かで鈍い姿を描きながらも、そこにまたおのずから末摘花の存在のもつ好ましい美徳が見えてくるという兩義性を持っている。

さらに、末摘花に對するこのような理解は、惟光から末摘花のことを伝えられた光源氏の言葉を通じても窺うことができよう。

(光源氏は)いみじうあはれに、かかるしげき中に、(末摘花か)何心地して過ぐしたまふらむ、今まではざりけるよ、とわが御心の情なさも思し知るる。(光源氏)「いかがすべき。かかる忍び歩きも難かる

6) 西郷信綱「物語文學の時代」(『日本古代文學史』岩波全書・1951) p.210

べきを、かかるついでならではえ立ち寄りし。(末摘花が)変らぬありさまならば、げにさこそはあらめと推しはからるる人さまになむ」…… (蓬生・三四七)

光源氏は荒れ果てた邸に、末摘花が昔のまま住んでいることを知り、自分のこれまでの末摘花への無關心を自責する気持ちでいる。全集はこの傍線部分の本文について、「光源氏がかつての関係から知っている末摘花の不器量さを思い出しつつも、改めてその誠實さに感動する」と説明している⁷⁾。光源氏は末摘花の愚直なまでに、自分の生活を守っている一種の誠實さに共感したのである。ここに示されているように、末摘花の誠實さは光源氏も認めるわけであり、彼が経験してきた末摘花には、愚直さのゆえに変わらないところがあったのである。例えば、かつて光源氏がはじめて末摘花を垣間見る場面には、随分傷んでいる几帳などが「年経にける立處かはらず、おしやりなど亂れねば(末摘花・二九〇)」と描寫されていた。末摘花は外部の世界の変化に対応して、自分を変えて行くようなことの出来ない女性であった。だからこそ、光源氏をいつまでも待ちつづけるということが可能だったのである。つまり、光源氏は末摘花が単に自分を待っていたから庇護しようと思ったわけではない。光源氏は愚直な末摘花の本性を理解し、自分を待った彼女のあり方から末摘花という存在の持つ優れた意味を改めて実感したからである。結局、末摘花は二條東院に引き取られるが、そこにも彼女の本性とでもいべきものに對する光源氏の思いが端的に示されている。

(光源氏は)見わづらひたまひて、「御衣ものなど、後見きこゆる人ははべりや。かく心やすき御住まひは、ただいとうちとけたるさまに、ふくみ萎えたるこそよけれ。うはべばかりつくろひたる御装ひはあいなくなむ」と聞こえたまへば、こちごちしくさすがに笑ひたまひて、「醍醐の阿闍梨の君の御あつかひしはべるとて、衣どももえ縫ひはべらでなん。皮衣をさへとられにし後寒くはべる」と聞こえたまふは、いと鼻赤き御兄弟なりけり。心うつくしといひながら、あまりうちとけ過ぎたりと思せど、ここにてはいとまめにきすくの人にておはす。(初音・一五四)

元日の挨拶のために二條の東の院を訪れた光源氏は、兄の世話のために自分は上辺だけ装った衣裳で寒さに震えている末摘花を見る。この末摘花の様子にはあまりに融通が利かない彼女の生活態度が如實に現れている。しかし、光源氏がそういう末摘花を「心美しい」と言ったのは、世俗的に愚かであっても同時に無垢な彼女の本性を理解していたからであろう。これこそが作者の思う末摘花像ではなかったか。つまり、この物語では、世俗的には愚かであっても、純粹無垢な存在である末摘花像を描くことによって、あらわにはないが實利的な時代の風潮を批判する視点をもって描かれているのである。

6. おわりに

以上のように、この物語の描いた末摘花という人物については、物語の主題、構想とはべつに、彼女の本性とでもいべき愚かさとうらはらな純粹無垢さという二つの側面そのものを理解するのが重要であろう。『源氏物語』の中で末摘花が問題にされたのは、末摘花のあり方に含まれているこの異な

7) 「源氏物語」(新編古典文學全集『源氏物語②』小學館・1996) p.347

る二つの側面をもつためだ、と考えられる。末摘花に限らずこの物語では、人間というものはいくつもの側面をもつ存在として描かれていると考えられる。つまり、『源氏物語』に描かれている末摘花という人物の愚かさは、少し視点をかえてみれば、決して、まったくの愚かさではない。勿論、現世的・世俗的な立場から見たら、末摘花の言動は非常識で愚かさばかりが見える。しかし、距離をおいて末摘花と世俗的な人々を客観的に見れば、末摘花の愚かさは同時に純粋な無垢さとも認められるものである。なお、この末摘花のあり方のもつ兩犠牲によって、物語では世の変化に敏感に反応して生きていく現世の風潮を批判的な視線をもって描いているのである。このような末摘花のあり方を、かつて『無名草子』の作者も注意して、彼女を好ましい女性と言ったのである。

【参考文献】

- ・『日本古典文學研究史大事典』(1999), 勉誠出版 p.98
- ・新編古典文學全集(1996)『源氏物語①』, 小學館 p.265~ p.307
- ・新編古典文學全集(1996)『源氏物語②』, 小學館 p.325~ p.355
- ・新編古典文學全集(1996)『源氏物語③』, 小學館 p.87~ p.161
- ・新編古典文學全集(1997)『源氏物語④』, 小學館 p.17~ p.285
- ・新編古典文學全集(1997)『源氏物語⑤』, 小學館 p.169~ p.341
- ・玉上琢弥(1967)『源氏物語評釋 第二卷』, 角川書店 p.163 ~p.246
- ・玉上琢弥(1967)『源氏物語評釋 第三卷』, 角川書店 p.365 ~p.440
- ・玉上琢弥(1967)『源氏物語評釋 第五卷』, 角川書店 p.21 ~p.208
- ・西郷信綱(1951)『日本古代文學史』, 岩波全書 p.203 ~p.220
- ・富倉徳次郎(1988)『無名草子評解』, 有精堂 p.68~p.69
- ・『國語國文』第三八卷 第二号(1969), 京都大學國文學會 p.19 ~p.29

要 旨

『源氏物語』の中でもっとも滑稽な人物と言われている末摘花は、13世紀初め頃に書かれた『無名草子』の源氏物語論では、好ましい女性の一人として評価されていた。本研究はそのことに着目して、改めて末摘花造型について考察し、その末摘花造型が『源氏物語』で持つ意味を明らかにしようとしたものである。『源氏物語』の本文を深く読んでいくと、愚かさに見える末摘花のあり方は純粋無垢さとしても讀みうる。たとえば、父宮の影響による末摘花の守旧な生活態度には戯畫化される部分が多いが、しかし、父宮の教えにひたすら従い、それを黙々と守り通す末摘花の様子には、愚直さと同時に父宮の教えを信じ切る純粋さも窺える。さらに、末摘花は光源氏や死んだ乳母など自分の身近な人から言われたことは一途に信じ、それを守り通すところがある。それは愚直さとも言えるが、同時にまた素直さと認めざるをえないのである。『源氏物語』の中で末摘花が問題にされたのは、このような末摘花のあり方に含まれている異なる二つの側面のためだと考えられる。そして、この兩犠牲とでもいうべき末摘花のあり方は現金な時代の風潮を浮彫りにしているのである。

キーワード：末摘花・『無名草子』・好もしさ・二面性・愚直さ・現世的

투 고 : 2004. 2. 28
1차 심사 : 2004. 3. 13
2차 심사 : 2004. 4. 3

住 所 : 663-8181 兵庫縣西宮市鳴尾町2-5-12
電 話 : 090-4493-6516
E-mail : itsoon215@yahoo.co.jp

